

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520554

研究課題名(和文)九州方言の音韻現象における接触・伝播・受容プロセスに関する研究

研究課題名(英文) A Research on the Process of Contact, Diffusion, and Reception in the Phonological Phenomenon of Kyushu Dialects

研究代表者

有元 光彦 (Arimoto, Mitsuhiro)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：90232074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果としては、まず長崎県・熊本県・鹿児島県・宮崎県・大分県のフィールドワークによって、動詞テ形・タ形・否定形の言語データを収集することができた。本研究では、特にテ形において、「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声の分布を類型化しているが、2つの方言タイプが共存する「共生タイプ」を初め、新たな方言タイプの新発見があった。これらの新発見によって、方言がどのように形成されるかという理論的な問題に関しても、解明の糸口が得られた。

研究成果の概要(英文)：As a result of this research, I could collect linguistic data of the verb te-form, ta-form, and negative form by the fieldwork of Kyushu dialects, i.e. Nagasaki, Kumamoto, Kagoshima, Miyazaki, and Oita dialects. In this research, I suggest a typology of the phonetic distribution on /te/ and /de/. I discovered new types of dialects, e.g. the symbiosis that two kinds of the dialect type coexist. By virtue of this discovery, I have got the key to a solution on the theoretical problems, i.e. how the dialect is formed.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学, 日本語学

キーワード：九州方言 音韻現象 テ形 共生タイプ 方言形成

1. 研究開始当初の背景

言語・方言の接触・伝播には、その対象レベルから分類すると、大きく語彙レベルと体系レベルがある。前者は、別の言語・方言どうしが接触することによって、単語などの語彙が伝播するものである。また、後者は規則的な体系そのものが伝播するものである。

従来の社会言語学では、大部分の研究が語彙レベルを扱うものであった。それは、周辺分布の原則(古語は辺境に残る)などの法則性といった言語地理学の成果として結実してきた。一方、体系レベルを対象とする研究では、近年になってバイリンガル、ピジン・クレオール、共通語化など様々な研究が見られるようになった。しかし、これらの研究では確かに体系レベルを扱ってはいるものの、全く質の異なる言語・方言体系が丸ごと入れ替わったり併用したりするような、いわゆる“大きな”体系どうしの接触によって“大きな”変化をもたらすものを扱う場合がほとんどであった。例えば、共通語化という現象であれば、ある方言体系と共通語体系という全く異なるレベルの体系が接触し、その結果、ある個人の中では、会話環境の違いによって、方言を話すか共通語を話すかというスイッチの切り換えが行われる、といった説明が成されてきた。即ち、“大きな”体系である方言体系と共通語体系が接触して、“大きな”変化を伴う切り換えスイッチが形成されたと考えるのである。

しかし、実際には全く質の異なる言語・方言体系が一気に入れ替わったり併用したりするような状態になるのではなく、その言語・方言体系の中の一部分から徐々に変化を起こすものと考えられる。受容する人間の立場に立っても同様で、自分が持っている言語・方言体系とは異なる体系を、ある時点で一気に入容することは、まず考えられないだろう。そこには、何らかの要因によって、受容される要素の優先順位のようなもの存在するだろう。即ち、地理的な場合であっても、一個人内の場合であっても、体系どうしが接触して伝播し受容するプロセスは漸次的であり、そのプロセスの進行には何らかのルールや法則性があるものと考えられる。

しかし、従来の社会言語学では、このような接触・伝播・受容のプロセスに関して明示的な解答を与えていない。その理由は、何より体系レベルの接触・伝播・受容のプロセスを明示的に説明できるだけのデータが十分に揃っていなかったからであり、また説明のための理論の構築が未熟であったからであるとえられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、九州方言における特徴的な音韻現象(テ形音韻現象)を対象として、異なる方言タイプが地理的に隣接する地域で見られる体系的な接触・伝播・受容を観察し、その現象を生成音韻論や生物学モデルを

利用して記述することによって、方言接触・伝播・受容のプロセスを説明するための統合的な理論を構築することである。さらに、構築された理論を検証するために、構成論的なシミュレーション実験を実施し、その検証方法を確立することを目指す。

具体的には、以下に挙げる4項目について解明することを目的としている。

(1)九州方言の音韻現象に関するデータの収集：ここでは、九州方言の音韻現象の1つである「テ形音韻現象」(「～て(きた)」というような動詞テ形に現れる特異な形態音韻現象)を対象とし、2つの方言タイプが地理的に接触している地域のデータを重点的に収集する。このような接触地域では、すでに有元光彦(2007)で言う「共生タイプ」(2つの異なる方言タイプが共生している、即ち伝播の途中段階を表す中間的な言語状態を持つ方言タイプ)がいくつか観察されている。この方言タイプには、接触・伝播・受容のプロセスを解明するための重要なキーが隠れていると考えられる。従って、今回のデータ収集では、調査地点を接触地域に限定して重点的に収集していくことによって、新たな共生タイプの発見を目指す。

調査対象地域を、異なる方言タイプが地理的に接触する地域に限定したことで、効率的に調査が可能になっただけでなく、何より、本研究で後に構築されるであろう理論を見据えて、そこから予測されるデータを収集、言わば理論の検証にもなっている。従来の方言調査のように、単に記述のための調査ではないのである。

(2)方言接触・伝播・受容のプロセスの記述：ここでは、方言間の接触・伝播・受容のプロセスを、生成音韻論におけるルールや制約、及び生物学における感染や免疫といった考え方を利用して記述していく。

(3)方言接触・伝播・受容に関する統合的な理論の構築：ここでは、語彙レベルの問題も(2)の観点から見直すことによって、語彙レベル・体系レベルの両現象を説明できる統合的な理論の構築を目指す。

従来の方言研究で最も弱いとされている理論構築に関して、本研究は顕著な貢献ができると考えている。即ち、生成音韻論のような客観的で厳密な記述装置を利用するだけでなく、従来全く無関係だと考えられていた生物学の手法を応用することによって、方言を対象とした理論的研究に道筋をつけることができるだろう。さらに、従来の方言研究では別個の問題として扱われてきた接触・伝播・受容のプロセスを統合的に解明することは、人間の言語行動のダイナミクスの本質を解明することになるだろう。

(4)構成論的シミュレーション実験による理

論の検証：ここでは、(3)で構築された理論を検証するために、構成論的な観点からのシミュレーション実験を行う。この実験は、科学研究費(No.16520281, 19652041)による研究成果報告書(有元光彦(2007, 2010))に結実した方法論を利用する。

本研究の独創的な点は、このようにして構築された理論を、元のデータからだけでなく、構成論的アプローチから検証することにある。このアプローチは生物学や経済学などで新しく導入された方法論であるが、そこで構築された人工生命や人工社会と同様に、人工・言語社会という仮想的な世界を構築することによって、従来検証できなかったルールや法則性をリアルに検証できることは、今後の方言研究を共時的にも通時的にも飛躍的に発展させることが可能になると考えられる。このようなアプローチは、申請者自身数年前から方言研究に採用しているが、本研究によりさらに精密化できると予想される。

3. 研究の方法

過去に記述した九州方言の音韻現象(テ形音韻現象)を参照することによって、異なる方言タイプが接触する地域を割り出し、その接触地域を重点的に現地調査する。そこでテ形音韻現象を精緻に調査し、初期生成音韻論・最適性理論・生物学モデルを利用してルール・制約・法則性を導き出し、テ形音韻現象を説明するための理論を構築する。さらに、そこで構築された理論を利用して、方言接触・伝播・受容のプロセスを理論化していく。最終的に、これらの理論を検証するために、従来行ってきた構成論的アプローチであるシミュレーション実験を実施する。

以下に、具体的な研究計画・方法を平成23年度と平成24年度以降に分けて記す。

(1)平成23年度：

データ収集：テ形音韻現象のタイプが異なる方言が地理的に接触する地域を対象として、重点的に現地調査(3日間×3回,1回につき4地点)を実施する。接触地域としては、熊本県本土北部・長崎県諫早市南東部(12地点)を想定している。本研究では、単にテ形音韻現象の記述が目的ではないため、従来の研究で得られた研究成果を参考にして、調査対象地域を限定している。

調査方法としては、まず各市町村の教育委員会等を通して話者の紹介を依頼し、夏季休暇等を利用して現地調査を実施する。調査票は従来の調査で使用している独自のものを統一して使用する。1名の話者につき1~2時間の聞き取り調査を行い、1地点につき2~3名の話者を調査する予定である。調査中は、ICレコーダ・PCMレコーダ[現有機器]を使用して、すべての発話を録音する(録音には事前に話者の許可を得る)。調査終了後には話者・紹介者に謝礼を渡す。

テ形音韻現象の記述・理論化：記述に関しては、まず、収集したデータを音声記号で転写し、データベース化していく。

次に、そのデータに観察されるテ形音韻現象を理論化していく作業であるが、伝統的な生成音韻論、最適性理論、生物学モデル、の3方向からのアプローチを採る。伝統的なアプローチは、初期の生成音韻論の枠組みを利用して、ルール化していくという方法である。従来の研究においても、同様の方法論を用いて記述しているため、これによって既存のデータとの比較が可能となる。次のアプローチは、最新の生成音韻論の枠組みである最適性理論を利用して、再記述を行うという方法である。最後のアプローチは、感染や免疫のシステムといった生物学モデルを利用するものである。これは、科学研究費(No.16520281, 19652041)による研究成果報告書(有元光彦(2007, 2010))に結実した方法論である。

方言接触現象の理論化： の成果を用いて、異なる方言間で起こる接触・伝播・受容のプロセスを理論化していく。従来の研究においても、 の1つ目と3つ目のアプローチについては一定の成果が得られているため、理論化作業の参考とする。

(2)平成24年度以降：

データ収集：データ収集は、平成24年度に熊本県天草諸島南東部・鹿児島北西部(島嶼部)(3日間×3回,1回につき4地点)、平成25年度に長崎県東北部(島嶼部を含む)・佐賀県西部の現地調査(3日間×2回,8地点)を計画している。いずれも、異なる方言タイプが地理的に接触すると予測している地域である。調査方法は平成23年度と同様である。

テ形音韻現象の記述・理論化：平成24,25年度に収集したデータについて、テ形音韻現象の記述・理論化を行っていく。アプローチの方法は、平成23年度と同様、3つの理論を利用する。

方言接触現象の理論化： の成果が明らかになり次第、順次本作業に入っていく。最終的には、平成25年度にすべてのデータを説明できる理論を構築する。

理論の検証：平成25年度に、現時点までに構築された方言接触・伝播・受容のプロセスの理論を、シミュレーション実験によって検証する。実験には、有元光彦(2007, 2010)で開発されたプログラムや方法論を利用する。

研究成果報告書の作成・頒布：本研究の総括として、平成25年度末に研究成果報告書を作成する。ここには、現地調査によって得られたデータ、テ形音韻現象の記述・理論、

方言接触現象の理論，理論の検証プロセス，シミュレーション実験結果等を掲載する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

言語データの収集：

フィールドワークによって，九州各地（長崎県・熊本県・鹿児島県・宮崎県・大分県）の動詞テ形の言語データを収集することができた。

具体的な調査地域は，熊本県阿蘇郡高森町，阿蘇郡産山村，上益城郡山都町，大分県日田市上津江町，熊本県天草市御所浦町，鹿児島県出水郡長島町獅子島，宮崎県えびの市，都城市，鹿児島県志布志市，霧島市，垂水市，肝属郡南大隅町，肝属郡肝付町，長崎県壱岐市である。

各地域おおよそ2名程度のインフォーマントに聞き取り調査を実施した。調査項目は，動詞活用形のテ形，タ形，否定形である。聞き取り調査の内容は，すべて音声データとして保存しており，また文字化したデータとしても記録している。

言語データの分析：

言語データは，まず音声記号で提示された上で，分析される。分析においては，まず伝統的な生成音韻論の枠組みを利用している。これは，現時点までの研究成果との対照を行うためである。ここでは，テ形音韻現象を主たる対象として，e 消去ルールや e/i 交替ルール等として，その音韻現象を記述していった。

例えば，熊本県上益城郡山都町方言では，次のようなルールによって記述される。

e 消去ルール：語幹末分節音が X でない動詞語幹にテ形接辞 /te/ が続く場合，テ形接辞 /te/ の /e/ を消去せよ。

$X = /w, b, m, s, k, g, r, t, n/ = [-syllabic]$

[syllabic] とは，生成音韻論で用いられる弁別素性の1つで，音節主音性を表す。これがマイナスの値を取っているということは，音節主音性を持たない，即ち子音を示すことになる。しかし，e 消去ルールは，その子音ではない語幹末分節音を持つ動詞の場合に適用されるので，語幹末分節音が母音のときに適用されることになる。例えば，生成音韻論では，<受ける> という動詞は /uke/ という語幹を持つと仮定するが，この語幹末分節音は /e/ という母音である。そこで，e 消去ルールの適用環境に合致するため，そのルールの適用を受けることになる。最終的には，[ukekkita]（ウケッキタ）<受けてきた> のような促音を含む形が派生されることになる。

さらに，e 消去ルールの適用環境 X は，方言による違いがあり，類型化できることが判明している。上記の $X = [-syllabic]$ を持つ方

言タイプは「真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）」と呼んでいる。

一方，この山都町方言は，次のようなルールも持っていることが判明している。

e/i 交替ルール：語幹末分節音が X でない動詞語幹にテ形接辞 /te/ が続く場合，テ形接辞 /te/ の /e/ を /i/ に交替させよ。

$X = /r, t, n/ = [-syllabic, +coronal, -continuant]$

このルールによって，最終的にはコーチキタ <買ってきた> のような「チ」が現れる形が派生される。

また，上記のような適用環境 X を持つ方言は，「擬似テ形現象方言（タイプ PA 方言）」として類型化されている。

以上より，類型論的には山都町方言はタイプ TG 方言とタイプ PA 方言の2種類の性質を同時に持つ方言ということになるが，このような方言タイプを「共生タイプ」と呼んでいる。

今回の調査・研究においては，共生タイプが新たに2方言発見されている。それは，前述の山都町方言と熊本県天草市御所浦町方言である。これらを合わせて，現時点で7方言が共生タイプとして類型化されている。これらの共生タイプを比較すると，九州西部には，タイプ PA 方言域とタイプ TA# 方言域という2つの大きな“受け皿”が存在することが見えてきた。ここでは，どのようなプロセスを経て共生タイプが形成されたかという仮説も構成的アプローチを利用して提示している。

研究成果報告書の作成：

上記の を盛り込んだ研究成果報告書『九州方言におけるテ形音韻現象の記述的・構成的研究』を作成した。

(2) 得られた成果の位置付けとインパクト

まず，動詞テ形の言語データが蓄積されたことは重要なことである。

また，新しい方言タイプの発見があったことも意義があり，テ形音韻現象全体の記述をしていく上で，大きな貢献をするものである。

その中でも，共生タイプの新たな発見はインパクトがあるものである。前述のように，共生タイプは方言の接触・伝播・受容のシステムを解明する上で，重大な鍵を握っていることが判明している。

従来の方言研究では，語彙の面での接触・伝播・受容のシステムはある程度解明されていたが，システムの面での解明はほとんど成されていなかった。この点でも，新たな方言タイプの発見はインパクトを与えるものと考えられる。

(3) 今後の展望

今後の言語データの収集によって，さらに

新たな方言タイプの発見が期待できる。それによって、記述の精度も上がるであろう。

また、理論的な問題もまだまだ解決していない。今回は、現時点までの研究と比較する便を考慮して、伝統的な生成音韻論の枠組みを中心に分析を行った。しかし、最新の音韻理論を用いた場合、新たな興味深い現象が浮かんでくるかもしれない。また、コンピュータシミュレーション研究も、今回は不十分であった。実験的な方法論は、斬新な手法であるだけに、今後の進展が期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

有元光彦, タイプ PD ' ' ', PG 方言の発見
熊本県北東部・大分県中西部方言の動詞テ形における形態音韻現象, 研究論叢(山口大学教育学部), 査読無, 第 62 巻第 1 号, pp.37-55, 2013 年,
<http://ci.nii.ac.jp/naid/120005246342>

有元光彦, 長崎県本土西南部方言の動詞テ形における形態音韻現象, 九州大学言語学論集, 査読無, 第 32 号, pp.167-185, 2011 年,
<http://ci.nii.ac.jp/naid/120004405467>

[学会発表](計1件)

有元光彦, 共生タイプについて 九州西部方言の動詞におけるテ形音韻現象を対象として, 第 12 回広島・方言研究会, 2012 年 6 月 23 日, 県立広島大学(広島市)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

有元光彦, 九州方言におけるテ形音韻現象

の記述的・構成的研究, 研究成果報告書, pp.1-162, 2014 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有元 光彦 (ARIMOTO, Mitsuhiro)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号: 90232074

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: